

義ののち、大分県安国寺集落遺跡、福岡県平塚川添遺跡、群馬県保渡田古墳群、大阪府新池埴輪窯跡、千葉県上総国分尼寺跡、岩手県志波城跡、福井県一乗谷朝倉氏遺跡、沖縄県首里城、の6つの遺跡についてそれぞれの復元整備例や活用の現状と問題点などが報告されました。

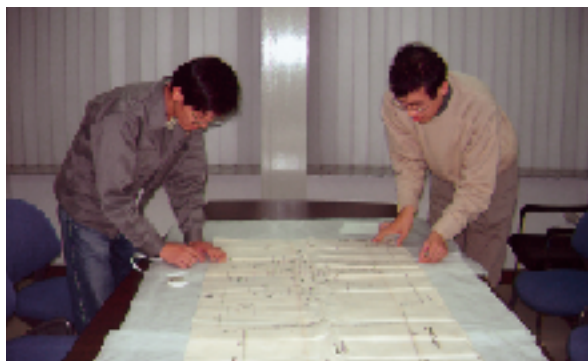
その後、全国各地方ごとの遺跡整備の現状をコメントしたパネリストも加えて、遺跡整備の理念、遺跡復元の技術・手法、整備した遺跡の維持管理の方法、遺跡の活用などを主なテーマに討議をおこないました。参加者約100名で、遺構復元と遺構保存とをどう調整するか、遺跡保存とバッファゾーン確保の問題、史跡公園とテーマパークとはどちらがうのか、などが議論されました。この研修で一定の結論が得られたわけではありませんが、遺跡の整備活用をどうすべきか、という問題は各地で直面している悩みであるだけに、時宜を得た企画として有意義であったとの感想が多くありました。ただし、日程の制約で討議が必ずしも十分深められなかったという指摘もあり、今後改善すべき点であります。

この研修は、研究集会方式という新企画のものでありましたが、こうした研修を今後積極的に進めてもらいたいとの声が多く、これから他の研修においても前向きに検討すべき点であると思われます。

(埋蔵文化財センター)

興福寺所蔵絵図の調査

文化遺産研究部歴史研究室では現在、興福寺のご厚意により、興福寺所蔵の140点におよぶ絵図類を調査しています。1点1点について、ラベルを貼り、基本的な書誌事項を調書にとり、写真を撮影する作業を順次進めているところです。



興福寺所蔵絵図の調査風景

それらの絵図の過半は、興福寺の子院を描いた指図です。寛政3年(1791年)に各子院の指図を一括して作成しているようです。境内や建物の輪郭を描いた、図としては簡略なものですが、面積・長さなどの書き込みがあり、当時の各子院の敷地・建物の状況を知ることができます。

明治維新までは、興福寺の寺域は現在よりもはるかに広く、現在の裁判所・県庁・文化会館・美術館・国立博物館・奈良ホテルやその周辺は、すべて興福寺の寺域だったのです。しかし興福寺はそのように大きな力を持っていたがために、明治維新の廃仏毀釈の際には、寺の存続さえ危ぶまれる危機に見舞われます。その後関係者の努力によって、また寺勢を盛り返していることは周知の通りですが、興福寺旧境内地の景観が、昔と今とはすっかり変化してしまっていることは事実なのです。

近世以前の興福寺は、広大な寺域の中に、100あまりの子院が所狭しと立ち並んでいました。それらのうち、興福寺の中心伽藍や、一乗院・大乘院などの主要院家については研究も進んでいますが、以外の中小の子院については、よく分からない点が多いのです。今回の絵図類からは、それらの子院1つ1つの状況を詳しく知ることができます。まだ調査途中で、私たちも詳細を把握しきれてはいませんが、近世興福寺全体の景観を復原する上での、基本資料になるのではないかと思います、日々はりきって調査にいそしんでいるところです。(文化遺産研究部)

中国河南省文物考古研究所との共同研究

奈文研と中国河南省文物考古研究所は、2000年度から5カ年計画で鞏義市に所在する唐三彩窯及び出土品に関する共同研究を実施しています。昨年度は、



鞏義市黄冶窯出土唐三彩